

令和六年度 A日程入学試験問題

国語

2月4日(日)

— 注意事項 —

- 2 1 問題は1ページから29ページ、解答用紙は一枚である。  
次の指示にしたがうこと。
- 文学部（日本文学科・中国文学科・史学科）は **1**・**3**・**4**を解答すること。  
文学部（外国語文化学科・哲学科）、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、  
観光まちづくり学部は **1**が必須、**2**・**3**・**4**から一つを選択して解答すること。  
（解答する問題番号を、解答用紙のマーク欄にマークすること。選択問題を複数解答し  
た場合は無効とする）
- 4 3 解答はすべて別紙解答用紙に記入すること。  
試験時間は六〇分である。

1 〔全学科の 必須〕

文学部日本文学科・中国文学科・史学科は解答欄 1 ～ 7 に、文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は解答欄 1 ～ 13 に解答すること。

(文学部日本文学科・中国文学科・史学科は問一～問五で40点)

(文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は問一～問九で70点)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

アフリカでは、放屁は単なる生理現象に止まらない。それは、人々を(1)周章狼狽させる一つの事件である。というのも、類存在として文化という秩序を生きる人間がお完全には抑え込むことのできない「自然」を自らの身体に抱え込んでいることを、放屁が唐突に暴露してしまうと見る感覚が、この土地の人々の間にはまだ生き続けているからである。放屁は、人間のそうした弱さとして文化の論理に潜在している小さな裂け目から一挙に噴出して、社会秩序を揺るがせる「自然」(反文化)なのである。

アフリカの伝統社会の多くの村落は、あたかも、熱帯雨林、サバンナ、砂漠、半砂漠などという諸々の自然の脅威が渦巻き騒ぐ大海に浮かんだ小さな孤島のように、互いに孤絶している。村の中では、人間の都合本位の人為的な秩序体系である文化の論理が貫徹して支配している。だが、一歩村の外に出た途端に、その鋭いアンチテーゼである反文化としての自然が、人間を押し潰そうと、有無を言わさずのしかかってくるのだ。

そればかりか、自然の神秘と暴威の重圧は、(文化領域である)村の中に隠蔽されている潜在的な亀裂へと集中して押し寄せ、その薄い皮膚を一気に突き破ろうと集中する——まるで、少し後でふれる赤ん坊のかわいい出臍の内圧のように。「人間の自然」を文字通り小宇宙として体現している身体こそが、村の外部の大いなる自然(大宇宙)と密かに通じ合っていて、文化の中に隠蔽された脆弱な亀裂の存在を示唆する、格好の事象なのだ。

(a) アフリカで今も恐れられている邪術師は、まさにこの亀裂から生まれ出る反社会的な(つまり「自然」的な)存在なのであり、だからこそ、彼らに帰せられる重大な属性の一つが「放屁する者」なのである。放屁とは、身体の内奥に潜む「自然」が身体の亀裂から噴出する典型的な現象の一つに他ならない。

礼儀として、公衆の面前で放屁するなど命ずる規範は、無論、「人間の自然」に反する。だが、それゆえにこそ、人間と自然を峻別する文化という（気まぐれな）秩序には、この規範は打って付けの原則となり得るのだ。だから、屁それ自体は「自然」に属していても、この規範に則ってしかるべき時にしかるべき所でしかるべき仕方とする無害な形での放屁は、まさに文化的な現象である。そして、それを恙なく遂行するには、生まれて以来の自己抑制のたゆまざる修練と、いささか厄介な（文化としての）技術が要求される。

この事実を私たちに鮮やかに教えてくれるのが、赤ん坊の存在である。一例を引いて、その論拠をわかりやすく説明してみよう。

もうずっと以前、妻が長女を出産した数カ月後のこと、赤ん坊を抱いて街に出るのはもうこりごりだと、顔をしかめながら笑って語ったことがあった。その日、妻は久しぶりでデパートに買い物に出掛けた。そして、すし詰めのエレベーターの中で、長女にとっても大きな、しかもとびつきり臭いオナラをされてしまった。周りからそれとなく投げかけられる、非難の籠もった視線を肌にピリピリ感じ取ってはいても、逃げるに逃げ出せず、全身にびっしり冷や汗をかいてしまったというのだ。

エレベーターの同乗者たちは、<sup>(2)</sup>不埒な拳に出たのが妻の腕の中で無邪気に微笑んでいる赤ん坊だとは、よもや思うまい。せっかく久し振りにおめかしして街に出掛けた妻だったが、楽しみや気晴らしでもあるはずの買い物物が、突然、衆目の中でひたすら赤恥に耐える苦行に変わってしまった。

<sup>(b)</sup>人になるとは、あの辺りの筋肉の使い方を巧みに調節する、雅びな文化的技術の（意識的・無意識的な）習得を含むものだという事情を、幼い娘が教えてくれたのだった。まだ若い頃のエピソードである。

ただし、赤ん坊の放屁の音が大きいのは、医師たちには周知の事実であるらしい。きちんとその生理的な原因もわかっている。目にも明らか<sup>(3)</sup>な傍証の一つが、まだ幼い頃には出臍の子供が多いという、私たちにも馴染みのある事実だという。

哺乳動物の臍の周りには、筋肉も筋膜も皮下脂肪もついていない。いわば、皮一枚で外気に接しているのだ。それで、腸の内圧が高まると、無防備なその部位から体外に向かって腸が徐々に押し出されてきて、いわば一種のヘルニア状態になる。これが出臍である。とはいっても、腹膜と皮膚の抵抗があるから、出臍が異常に大きくなることは、まずない。

何といっても、出臍が多いのは乳児たちである。それというのも、乳を飲み込む時にかなりの量の空気も一緒に吸い込むので、腸の内圧がどうしても高くなってしまふからだ。しかも、赤ん坊は四六時中眠っているが、寝た姿勢ではゲップが出にくくなってしまふ。乳はやがて腸内で消化吸収されるけれども、空気はそのまま取り残されて溜まってくる。赤ん坊のお腹が何時も膨れている原因の一つが、これである。その結果、腸の内圧が高まり過ぎると、腸内ガスが時々びっくりするほど大きなオナラとなって、赤ん坊のまだ飼い馴らされていないかわいなお尻か

ら、勢い良く吹き出すことになるのだ。

母乳や牛乳を飲んだわが子の背中をまっすぐに立てて根気良く摩こってやり、やがてゲップが出ると一安心してその手を止める。これは、父親であれ、親たる者の誰もが幾度かはする経験だろう。そうしなければ赤ん坊は、飲み込んだばかりの乳をゲップと一緒に吐き戻してしまうのである。子供がやがて立って歩きまわるとなると、ゲップもかなり出やすくなって、お腹の張りもずっと弱まるという。

ところで、ケニアのキプシギス族では、奇妙なことにもっと大きくなってからも出臍を突き出している子供がたくさん目につく。これは、一体なぜだろうか。あるいは、元々牛牧民であり、牛乳を飲む機会が多いのがその原因かも知れない。また、穀物、繊維質が多い芋類、糖質の消化吸収が悪いバナナなどを大量に食べることも無関係ではないだろう。ただ、その子供たちの出臍も、何も処置しないのに、やがていつの間にかきれいに姿を消してしまう。

歌人の若山喜志子は、孫が赤ん坊だった頃の出来事を、こう歌に詠んだ。「思はずも／一つもらして／幼児は／われと驚き／高笑ひせり」。きつと、赤ちゃんが自分でもびっくりして笑い出したこのオナラも、相当大きかったのではないだろうか。ただし、幸いにも、デパートのエレベーターの中ではなかった。家族が幼子と過ごすこんな機会には、そのオナラはいささか滑稽であつても安らかな気分を助長して、一層温かな思いを深めてくれる。この事実もまた、放屁が単に生理現象であるばかりでなく、優よれて文化的な現象であつて、二人以上の者が居合わせる状況（社会学でいう「社会」）ではそれに応じた人間的な意味を色濃く帯びる事実を確認させてくれるだろう。

ついでながら、「足の皮はあつきがよし、Iの皮はうすきがよし」と言ったのは、江戸中期、豊後は国東の里に生まれ住んだ孤高の思想家、三浦梅園である。しかしながら、同郷の我が妻の身に振りかかった突発的な「災難」を思えば、社会に出て不特定多数の人々と交わる機会が飛躍的に拡大した現代の若い母親は、（今や美しく且つ丈夫な靴を纏まとっている）足の裏の皮ではなく、Iの皮が多少とも厚くなくては務まらないのかも知れない。人間の身体もまた、各時代の文化の現実の中にあつて、その文化が付与する意味を忠実に生きて独得の表情を得るのである。

人体の切り離されたり脱落した一部分や、人間から外界へと溢あふれ出てくる諸々の排出物は、いずれも両義性（正負の価値を併せ持つ属性）を帯びた物として、どの社会でも、人々の強ちやうい関心を引き付ける。そして、その両義性は「穢けがれ」（「汚れ」）として象徴され、文化の秩序から排除されると共に、強い関心の対象となる。尿や屁などの排泄物はいせつぶつ、その中でも特に糞便ふんべんが身体からの排出物の典型的な例として劇的な効果をもつことは、誰にとっても明白な事実であろう。

これに関連するのが、幼い子供が或る時期に糞便に異常に強い関心を抱くことがあるという、世界中のどの社会でもよく知られている事実で

ある。そして、若山喜志子が孫の振る舞いに見出したように、子供はこのほか放屁を面白がる。この現象が普遍性をもつのは、次のような事情のゆえだ。

この時期に、子供は自然的な存在（種としてのヒト）から文化的な存在（類としての人間）へと移行するために、絶えず言語や身振りなどを覚える訓練をしながら、文化という「象徴の森」の中へ一歩一歩分け入りつつある。つまり、自然は本来どこにも切れ目のない連続体のだが、人間は自分が生み込まれた文化に固有の（言語）カテゴリーに従って、多くの不連続な部分の集合として自然を認識するように自ら仕向けているのである。こうして、子供にとつても、自然は（他の動物にとつてのように）単なる外部環境ではなく、統一された秩序をもち、人間がその中心にいる、一つの世界として徐々に姿を現わし始めるのである。

物心がついて「自分」ができたとは、自分と自分ならざるもの（としての世界）とが同時に切り分けられ（「分節」され）て成立したということである。どの子供にも、必ず「なぜ」「どうして」と尋ね続けて止まず、親をほとほと閉

## II

させる一時期があるものだ。どんな

に意を尽した親の答も、決して子供を満足させはしないだろう。何しろ、子供は、本当は、世界のかれこれの特定の事柄のどれかが

III に落ちないのではなく、自分の周りに世界（自分ならざるもの）が存在している、そのこと自体が不思議でならないからだ。この根源的な問には、答がない。

「象徴の森」に分け入る訓練を始めた段階の幼児にとつては、（世界に向き合っている当の）自分とは一体何なのか、またどこまでが自分で、どこからが（自分ならざるものである）世界なのか、即ち、その境目がどこにあるのかが、やがて最大の存在論的な問題になって来る。

排泄物、ことに糞便は、自分の身体から絶えず大量に湧き出してくる物であって、自分と世界とを直接的に媒介する。それは、世界（の一部）であって且つ世界でなく、また今や自分であって且つ自分ではないのだ。だから子供は、その著しい両義性に強く引きつけられて、糞便が一体どのカテゴリーに属するものなのか、きちんと知りたくて堪らない。それがわからなければ、一つの部分が他のすべての部分と相互に切りわけ合っている（示差的な）様々なカテゴリーの総和としての世界が、曖昧な隙間だらけのものになってしまうのだから。

（O・呂陵氏の文章に基づく）

問一 二重傍線部 (1)・(2)・(3) の意味として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中からそれぞれ一つずつ選び、(1) は解答欄  に、

(2) は  に、(3) は  にマークしなさい。

- (1)
- |                                |   |            |
|--------------------------------|---|------------|
| <input type="text" value="1"/> | ア | 激高し荒ぶるさま。  |
|                                | イ | 慌てうろたえるさま。 |
|                                | ウ | 白眼視されるさま。  |
|                                | エ | 羞恥し赤面するさま。 |
|                                | オ | 赤心を吐露するさま。 |

- (2)
- |                                |   |                 |
|--------------------------------|---|-----------------|
| <input type="text" value="2"/> | ア | 道理に外れ、けしからぬこと。  |
|                                | イ | 素行が悪く、だらしないこと。  |
|                                | ウ | 性質が悪く、わきまえぬこと。  |
|                                | エ | 想像を超え、はなはだしいこと。 |
|                                | オ | 理由が無く、おちつかないこと。 |

- (3)
- |                                |   |                     |
|--------------------------------|---|---------------------|
| <input type="text" value="3"/> | ア | 第三者から提出される明らかな根拠。   |
|                                | イ | 間接的に事実であることを補強する根拠。 |
|                                | ウ | 説得の必要もないほどよく知られた根拠。 |
|                                | エ | 立論の中心にはなりえない個別の根拠。  |
|                                | オ | 証拠となりうる強い説得力を持つ根拠。  |

問二 傍線部 (a) の説明として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 4 にマークしなさい。

ア アフリカの伝統社会では大海の孤島のように孤立した文化領域である村の中に小宇宙としての「自然」を抑え込んでおり、村の外ではアンチテーゼとしての「反自然」が人間にのしかかってくるとされている。放屁は人体の亀裂を破って「自然」を出現させる行為であるため、自然な存在の邪術師は「放屁する者」とみなされているということ。

イ アフリカの伝統社会では文化という秩序を生きる人間は反文化としての自然にあらがうことで存在を保っていると考えられており、人間の文化領域は村の中のみ展開されている。放屁は村の外部の大きいなる「自然」を内部に呼び込む行為であるため、文化の論理を貫徹する邪術師は「放屁する者」とみなされているということ。

ウ アフリカの伝統社会では村落は隔絶した小さな孤島のように孤絶した領域であって、村の外には人間を押し潰す「自然」の力が充満していると考えられている。放屁は村という文化領域で隠蔽されている潜在的な亀裂の象徴であり、それを破って他の文化領域からの論理を噴出させる邪術師は「放屁する者」とみなされているということ。

エ アフリカの伝統社会では村の外部の大きいなる「人間の自然」が人間の都合本位の秩序を取り巻いており、その渦巻き騒ぐ大海の外に反文化としての「自然」が存在している。放屁は「人間の自然」ではなく反文化としての「自然」と密かに通じ合う方法であるため、邪術師は「放屁する者」とみなされているということ。

オ アフリカの伝統社会では村落は自然の暴威の中にかろうじて存在しているととらえられており、人間の文化的秩序は村の中でのみ機能し、村の外では自然の力に押し潰されてしまう。放屁は人間社会に恐るべき「自然」を出現させる行為であるため、反社会的存在である邪術師は「放屁する者」とみなされているということ。

問三 傍線部 (b) の説明として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 5 にマークしなさい。

ア 赤ん坊の放屁の音が大きいことは周知の事実であるため、不適切な状況においてその腸内ガスの噴出を防ぐ必要がある、親たるものは赤ん坊という文化的な存在のゲップや屁を出やすくするための筋肉の調節の習得が不可欠であるということ。

イ 放屁を文化的規範に従って人に知られず無害な形で行うためには、不適切な状況においては腸内ガスの噴出を防ぐ必要がある、文化的な存在に移行するにはそのような状況判断の下で放屁を調節する筋肉の制御技術の習得が不可欠であるということ。

ウ 文化的な存在である哺乳動物の膈の周りは皮一枚で外気に接しているため、不適切な状況においてはヘルニア状態になることを防ぐために腸内ガスの噴出を抑制する必要がある、そのためたゆまざる修練による筋肉を調節する技術の習得が不可欠であるということ。

エ 乳児は乳を飲み込む時に空気も一緒に吸い込んでしまうから屁やゲップが出やすいため、不適切な状況において腸内ガスが噴出しないよう修練する必要がある、立って歩きまわる文化的な存在に移行するための筋肉の調節と文化的技術の習得が不可欠であるということ。

オ 公衆の面前での放屁は礼儀として定められた規範に反するため、不適切な状況においては腸内ガスの噴出を防ぐ必要がある、そのためには文化的な存在に移行するための人間の筋肉の調整と自然の峻別の技術の習得が不可欠であるということ。

問四 傍線部(c)の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 6 にマークしなさい。

ア 文化的な存在として成長する過程の幼児は、本来はひとまとまりの自然を言語によって切り分け、不連続な部分の集合が統一されたものとして世界を秩序立てる訓練をしているため、糞便を意味づけて自分と切り分けることのないまま放置してしまつては、世界の認識が成立しなくなるということ。

イ 幼児は成長に伴い自然的な存在から文化的な存在へと移行していくが、その過程で本来境目のない外部環境を切り分けて意味づけることで不連続な部分を作り、その部分を集合して自然を一つの秩序をもつ世界として認識するため、著しい両義性を持つ糞便は持てあましてしまうということ。

ウ 自分と自分ならざるものを分節していく訓練を始めた時期の幼児は、人間が中心となる秩序ある一つの世界を作るために切れ目のない自然を認識するため、自分の一部であつて自分でない糞便と自分とが世界を相互に切り分け合っていると認識するようにならなければ、世界が統一されないということ。

エ 言語や身振りなどを覚える訓練をする時期の幼児は、生み込まれた文化に固有のカテゴリーに従つて統一された秩序を獲得し、不連続な部分を統一して切れ目のない連続体としての自然を認識するため、糞便がどのカテゴリーに属するかに答えを出せないままであるということ。

オ 物心がついて自分と自分ならざるものを切り分ける時期の幼児は、どこまでが自分でどこからが世界なのかに最大の関心を持っているため、自らの身体から湧き出すという両義性をもつ糞便を、秩序だった切れ目のない連続体に属させることができないと世界が成立しないということ。

問五 問題文の内容としてふさわしいものを、次のア～カの中から二つを選び、解答欄 7 に二つマークしなさい。

- ア 赤ん坊のお腹が膨れて出臍が多いのは、腸の内圧が高く飲んだ乳を吐き戻してしまっただけである。
- イ ケニアの牛牧民であるキプシギス族は芋やバナナを食べるため、成長してからも出臍のままである。
- ウ 若山喜志子は、赤ん坊だった孫の大きな放屁に驚き、笑ってしまった経験を歌に詠んでいる。
- エ 江戸中期の孤高の思想家三浦梅園は、著者と同郷の豊後国の国東地方の出身である。
- オ 幼い子供がある時期に糞便や放屁に異常な関心を示すのは、世界で共通する現象である。
- カ 子供の「なぜ」「どうして」に親が答えても子供が満足しないのは、答えない問いだからである。

**注意** 文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は、次のページに問題が続きます。

←

問六 (文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部のみ解答すること)

空欄

I

II

III

に入る語として最もふさわしいものを、次のア～キの中からそれぞれ一つずつ選び、

I

は解答欄

8

に、

II

は

9

に、

III

は

10

にマークしなさい。

ア

口

イ

脛すね

ウ

腑ふ

エ

面

オ

手

カ

腹

キ

眼

問七 (文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部のみ解答すること)

波線部 (X) の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つを選び、解答欄 11 にマークしなさい。

ア 人間は自然を体内に抱え込んでいる存在であるため、身体が亀裂からそれを漏らすことは自然の秩序に反するという事。

イ 人体の内奥に潜在する腸内ガスが噴出する放屁は、人間が文化的であるために抑え込むべき典型的な現象だということ。

ウ 元来、生物としての人間は自由に腸内ガスを排出するものであるが、文化的規範はそれを認めていないということ。

エ 無害な形での放屁は自己抑制のため過ぎる修練によるものであり、その技術の習得は反社会的であるということ。

オ 放屁は外部の大いなる自然と密かに通じ合うものであり、内部の秩序との矛盾の体現でもありうるということ。

問八 (文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部のみ解答すること)

波線部 (Y) の説明として最もふさわしいものを、次の A～オの中から一つ選び、解答欄 12 にマークしなさい。

A 放屁は単なる突発的な生理現象というだけでなく、不特定多数の人々と交わる機会に放たれる赤ん坊の屁が「社会」における人間的な意味をつないでくれるなど、文化の現実の中にある現代的な現象だということ。

イ 放屁は単なる規範の侵犯というだけでなく、赤ん坊が自分でも笑ってしまうような大きな放屁は人々に安らかで温かな思いをもたらしてくれるなど、両義性を帯びている無意識的な現象でもあるということ。

ウ 放屁は単なる人間と自然を峻別する原則というだけでなく、家族が赤ん坊と過ごす機会に滑稽さと安らかさをもたらしてくれるなど、文化的技術を習得した人間のみが生み出しうるすばらしい現象だということ。

エ 放屁は単なる筋肉の使い方の技術の失敗でなく、家族が居合わせる状況での赤ん坊の大きな放屁は温かな思いという人間的な意味を助長してくれるなど、人間が自然に属することを再認識させてくれる現象だということ。

オ 放屁は単なる腸内ガスの噴出というだけでなく、家族と過ごす赤ん坊の大きな放屁が非難を受けるところか温かな思いを深める機会になるなど、その場の関係性に応じた意味を付与されている現象であるということ。

問九 (文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部のみ解答すること)

波線部 (Z) の説明として最もふさわしいものを、次の A～オの中から一つ選び、解答欄 13 にマークしなさい。

ア 人体からの排出物は自らの中からのものでありながらすでに自らの一部ではなく、相反する二つの意味を合わせ持つため、人々が強くひきつけられるということ。

イ 人間から溢れ出る排出物は、自分の一部であったと同時に別個の物として存在しているため、世界と向き合う幼い時期の子供だけが強くひきつけられるということ。

ウ 糞便に代表される排出物などは、病原体などの穢れを象徴する危険な物体のため文化から排除せねばならず、防衛のため人間は強く警戒せざるをえないということ。

エ 人体の切り離された一部や排出物などは、汚れとしての実体と文化が付与する意味が重ね合わせられるため、各時代の人々が強くひきつけられるということ。

オ 諸々の排出物は自然的な存在であるが、言語や身振りといったカテゴリーに属する外部環境でもあるため、幼い子供が強くひきつけられるということ。

この問題は、解答欄 

|    |
|----|
| 21 |
|----|

 ～ 

|    |
|----|
| 27 |
|----|

 に解答すること。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(30点)

物語の特性のなかで、まず強調したいのは、その「関係づける」はたらきであろう。あるいは、何かを「関係づける」意図から物語が生まれてくる、と言ってもよい。

非常に単純な例を考えてみよう。コップに野草の花がひとつ挿してある。それだけのことなら、別に誰もその花に注目しないかも知れない。しかし、それは病気で寝ている母親を慰めようとして十歳の少女が下校のとき摘んできたのだと知ると、その花が単なる花でなくなってくる。その花を介して、その少女に親しみを感じ、その母娘の間の感情がこちらに伝わってくる。そこに「関係づけ」ができてくる。そのことに感激すると、そのことを誰かに話をしたくなる。友人に話をするとき、少女が花を買おうと思ったのだが、彼女には高すぎたので困ってしまったが、ふと野草の花を見つけて……というふうに話が少し変わることもある。それを聞いた人が他人に伝えるときは、母親がその花を見て嬉しく思うと、高かった熱がすうーと低くなって……とつけ加えるかも知れない。

だから「物語」は信用できないという人がある。それも一理ある。物語を文字どおり真実だというのは馬鹿げているが、だからと言って、それが無意味というのもおかしい。物語を語ることによって、母娘の関係の在り方がわかり、それに感動することによって、語り手と聞き手との間に関係が生まれ、このように「関係の輪」が広がっていくところに意味がある。かわりのなかの真実が、それによって伝わっていく。

物語の本質については、よく知られているように紫式部が、既に『源氏物語』のなかで、千年近くも以前に論じているのは大したものである。「蛩」の巻で、光源氏は最初は「物語には本当のことは語られることが少ない」というように低い評価をするが、そのうちに、物語こそ単なる事実を述べているものよりも、真実を伝えるものだと言う。このときの、「日本紀などは、ただ片そぼざかし」と言う源氏の言葉は、ズバリとした表現である。事実のみを述べている『日本紀』などは、ほんの片はしにすぎないと言っている。物語創作に命をかけた紫式部の誇り高い<sup>(1)</sup> 気概が、光源氏の口を借りて表わされているのだ。

<sup>(b)</sup> このように高い評価を得ていた物語が急速に価値を失うのは、近代になってからであろう。それには自然科学の果たした役割が大きい。自然科学は外的事実の間の「関係」、特にその「因果関係」を見出すことに努力するが、そのような外的事実を、観察者(研究者)とは関係のない

ものとするのが前提となっている。このために、そこに見出されたものは個人を超える普遍性をもっている。この「普遍性」ということが実に強力である。つまり自然科学によって見出された結果と技術とがうまく結合すると、人間は事象の「外側に」立って、それをコントロールし、操作できる立場を獲得する。この方法があまりにも効果的であるために、人間は科学の知によってすべてのことが可能になると思ったり、科学の知こそが唯一の真理である、とするような思い違いをしたのではなからうか。

このような思い違いをすることによって、多くの現代人はこの世との「関係」を切断され、I のようになってしまった。便利で能率よく生活することが可能になったが、いったい何のために生きているのか、その意味が急に稀薄に感じられるようになったのである。「意味」とは、関係の在り方の<sup>(2)</sup> 総体のようなものである。私と私を取り巻く世界との関係がどんなものかがわからずに生きていても、「意味」が感じられないのも当然である。

しかし、このようなことに気づく前に、多くの人が自然科学の知以外の知を否定しようとしたり、軽蔑したりしたのではないだろうか。そして多くの学問研究も「科学的」であろうとし、十八世紀の物理学の方法論を、社会科学でも人文科学でも自分たちの領域に適用しようとして試みた。それはそれなりの成果を得たのは事実であるが、そのみが学問であるとか、真実を知る方法であると考えるのは誤りである。

自然科学の知万能のような考えについて、現代人はいろいろな点で反省を促されることになったが、そのひとつの大きい主題は「死」のことであろう。いかに医学が進歩しても、人間の死を拒否することはできない。せめてできるだけだけの長寿を、ということと、延命の医学はずいぶん発達した。このために近代人の平均寿命も長くなった。しかし、そのことのためにかえって「死」の課題はよけいに深刻になってきた。

これは既に述べてきたように、自分と関係のないこととしての「人間の死」については科学的に研究できるだろう。しかし「私の死」については、それは不可能である。それどころか、私の親しい人についても同様ではなからうか。家族とか恋人とか、自分にとって大切な人の死を経験した人が、時に抑うつ症になって、われわれ心理療法家のところに来談する。「なぜ、あの人は死んだのか」という、<sup>(c)</sup> この人たちの問いに対して、科学的な説明をしても意味がない。この人たちは、二人称の死に対する意味づけを知りたいのだ。言い換えるなら、それについて自分も納得のいく「物語」を見出したいのである。

このように考えると、物語のなかで「死」について語られるのが多いのに気づくだろう。「一人称の死」、「二人称の死」は人間にとっての永遠の課題である。したがって、それは物語のなかで主題となりやすいのである。王朝時代の物語においても、死がまったく語られていないものはない。その語られ方はさまざまであろうが。

(河合隼雄の文章に基づく)

問一 二重傍線部(1)・(2)と同じ意味の語を、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、(1)は解答欄  に、(2)は  にマークしなさい。

(1)

|    |    |    |    |    |  |
|----|----|----|----|----|--|
| 21 | }  |    |    |    |  |
| オ  | エ  | ウ  | イ  | ア  |  |
| 気品 | 気性 | 気骨 | 気鋭 | 氣息 |  |

(2)

|    |    |    |    |    |  |
|----|----|----|----|----|--|
| 22 | }  |    |    |    |  |
| オ  | エ  | ウ  | イ  | ア  |  |
| 全体 | 実体 | 客体 | 大体 | 具体 |  |

問二 空欄  に入る語として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄  にマークしなさい。

- ア かんこどり 閑古鳥
- イ 塞ぎの虫
- ウ 水を得た魚
- エ 根無し草
- オ 鳥なき里の蝙蝠 こうもり

問三 傍線部 (a) の説明として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 24 にマークしなさい。

ア コップに挿してある花が、病床の母親を慰めるために少女が摘んだものと知ると、その花に対する見方が変わり、感情が動かされるように、物事を介して人と人の中に意味を見出し、さらにその意味を膨張させる機能。

イ コップに挿してある花が、病床の母親を慰めるために少女が摘んだものと知ると、それが単なる花として見られなくなってくるように、物事と物事との間に外的な因果関係を見出し、さらにその因果関係を複製させる機能。

ウ コップに挿してある花が、病床の母親を慰めるために少女が摘んだものと知ると、その事実から真実を悟って感激するように、二つの物事に対する心の在り方を変質させ、さらに真実を事実に変換させる機能。

エ コップに挿してある花が、病床の母親を慰めるために少女が摘んだものと知ると、一人称や二人称の死が自分のことのように感じられてくるように、物事の本質を明らかにし、さらにその本質を増殖させる機能。

オ コップに挿してある花が、病床の母親を慰めるために少女が摘んだものと知ると、個人の意図を超越した価値が付与されるように、物事の奥底にある普遍性を獲得し、さらにその普遍性を個人に還元する機能。

問四 傍線部 (b) の説明として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 25 にマークしなさい。

ア 個別的な場合にのみ相当する近代科学の知だけが、かけがえのない規則であるという思い込みが生じた結果、現代人の多くが外的な事実を観察して関係づけることを諦めてしまったということ。

イ 客観性を持った自然科学の知だけが、ただ一つの正しい真理であるという錯覚が浸透した結果、現代人の多くが、人と人を関係づけることをしなくなってしまうということ。

ウ 一般性を持っている近代科学の知だけが、無二の正確な真実に到達できることが分かった結果、現代人の多くが物事同士を関係づけることに意味を見出せなくなってしまうということ。

エ 物事全般に該当させられる近代科学の知だけが、世の中に二つとない事実を技術と結合させられると誤解した結果、現代人の多くが物事間の因果を関係づけなくなってしまうということ。

オ 特殊性を持たない近代科学の知だけが、比類のない原則であるという誤謬が広まった結果、現代人の多くが個人を超えて物事を理解して制御しようとするようになってしまったということ。

問五 傍線部(c)の理由として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 26 にマークしなさい。

ア 自然科学万能の時代にあつて、医学は着実に進歩を遂げ、人類は人間一般の死を客観的に観察する機会が増えたが、その結果、自分や自分の親しい人の死を主観的に観察する機会が減り、生きていることを実感できなくなったから。

イ 自然科学万能の時代にあつて、医学は着実に進歩を遂げ、人類は二人称や三人称の死を回避することに成功したが、その結果、一人称の死に対する意味づけが希薄になり、その理由を説明することができなくなったから。

ウ 自然科学万能の時代にあつて、医学は着実に進歩を遂げ、人類はかつてよりも死を遠ざけることが可能になったが、その反面、自分や自分の親しい人の死を内的な真実として意味づけて、その理由を説明することができなくなったから。

エ 自然科学万能の時代にあつて、医学は着実に進歩を遂げ、人類にとつて死は身近なものではなくなったが、その結果、便利で能率の良い生活を志向するようになり、生きていることの意味づけが希薄になったから。

オ 自然科学万能の時代にあつて、医学は着実に進歩を遂げ、人類の平均寿命は著しく伸びたが、その結果、自分にとって大切な人の死が一人称や二人称の死として語られなくなったから。

問六 問題文の内容として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 27 にマークしなさい。

ア 『源氏物語』の中で、光源氏は、事実を述べている歴史書にはない真実が物語にはあると話している。物語とは、物事と物事を関連づけて意味を見出すことから生じるものであり、そこに一つの真理が描かれている。そうした物語の本質は、客観的な観察によって普遍性をもつ真理に到達しようとする自然科学の立場から見ると信頼性の低いものだが、現代を生きる人にとって重要な鍵になる。なぜなら、物語によって立ち現れる意味によって、自分が世界とつながっていると感じられるからである。

イ 『源氏物語』の中で、光源氏は、事実を述べている歴史書とは異なる真実が物語にはあると話している。物語とは、物事と物事を関連づけて意図を見出すことから生じるものであり、そこに一つの真理が描かれている。そうした物語の本質は、因果関係を重視して真理とは何かを考える自然科学の立場から見ると信頼性の低いものだが、現代を生きる人にとって重要な鍵になる。なぜなら、物語に内包されている意味によって、現代人が抱える心理的な問題が解決できるからである。

ウ 『源氏物語』の中で、光源氏は、事実を述べている歴史書と同じ真実が物語にはあると話している。物語とは、物事と物事を関連づけて事実を見出すことから生じるものであり、そこに一つの真理が描かれている。そうした物語の本質は、外側から事象をコントロールしようとする自然科学の立場から見ると信頼性の低いものだが、現代を生きる人にとって重要な鍵になる。なぜなら、物語が世界を意味づけることによって、人と人とが結びつけられるからである。

エ 『源氏物語』の中で、光源氏は、事実を述べている歴史書に通ずる真実が物語にはあると話している。物語とは、物事と物事を関連づけて真実を見出すことから生じるものであり、そこに一つの真理が描かれている。そうした物語の本質は、人間の死に向き合うのを避けてきた自然科学の立場から見ると信頼性の低いものだが、現代を生きる人にとって重要な鍵になる。なぜなら、物語の中で死について言及することによって、高齢化社会を生き抜けるからである。

オ 『源氏物語』の中で、光源氏は、事実を述べている歴史書で否定された真実が物語にはあると話している。物語とは、物事と物事を関連づけて普遍を見出すことから生じるものであり、そこに一つの真理が描かれている。そうした物語の本質は、外的事実を人間から切り離す役目を担う自然科学の立場から見ると信頼性の低いものだが、現代を生きる人にとって重要な鍵になる。なぜなら、物語を方法論として他分野の研究に適用することによって、自然科学の知以外の知を再評価できるからである。

〔文学部日本文学科・中国文学科・史学科は 必須〕。文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は 選択 〕

文学部日本文学科・中国文学科・史学科は解答欄 41 ～ 59 に、文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は解答欄 41 ～ 56 に解答すること。

〔文学部日本文学科・中国文学科・史学科は問一～問十一で40点〕

〔文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は問一～問八で30点〕

次の文章は、『源氏物語』の一節で、最愛の女性を亡くした帝が、その女性の里に弔問の使いを送る場面である。里には亡くなった女性の母君と、帝とその亡くなった女性との間に生まれた若宮がいる。これを読んで、後の問いに答えなさい。

野分<sup>(a)</sup>だちて、にはかに肌寒き夕暮れのほど、常よりも思<sup>(b)</sup>し出づること多くて、<sup>(1)</sup>おほい<sup>(1)</sup>遣<sup>(a)</sup>はず。夕月夜<sup>(c)</sup>のをかしきほどに出だし立てさせたまひて、<sup>(2)</sup>やがてながめおはします。かうやうのをりは、御遊<sup>(d)</sup>びなどせさせたまひしに、心<sup>(e)</sup>ことなる物の音<sup>(f)</sup>を掻き鳴らし、はかなく聞こえ出づる言の葉も、人よりはことなりしけはひ容貌<sup>(g)</sup>の、一面影<sup>(h)</sup>につと添<sup>(i)</sup>ひて思<sup>(j)</sup>さるるにも、闇<sup>(k)</sup>の現<sup>(l)</sup>にはなほ劣<sup>(m)</sup>りけり。

命婦<sup>(n)</sup>、かしこにまうで着きて、門<sup>(o)</sup>引き入るるより、<sup>(3)</sup>けはひあはれなり。やもめ住みなれど、人ひとりの御かしづきに、とかくつくるひ立て、めやすきほどにて、<sup>(4)</sup>過<sup>(p)</sup>ぐしたまひつる、闇<sup>(q)</sup>にくれて臥<sup>(r)</sup>ししづみ、<sup>(5)</sup>たまへるほどに、草も高くなり、野分にいとど荒れたる心地して、月影ばかりぞ、八重葎<sup>(s)</sup>にもさはらずさし入りたる。

南面に下ろして、母君もとみにえものものたまはず。「今までとまり、<sup>(6)</sup>はべるがいと憂きを、かかる御使<sup>(t)</sup>の蓬生<sup>(u)</sup>の露分け入りたまふにつけても、いと恥づかしうなむ」とて、げにえ、<sup>(7)</sup>たふまじく泣い、<sup>(8)</sup>たまふ。「『参りては、いとど心苦しう、心肝も尽くるやうになむ』と典侍の奏したまひしを、<sup>(9)</sup>もの思ひたまへ知らぬ心地にも、げにこそいと<sup>(10)</sup>恐<sup>(v)</sup>びがたうはべりけれ」とて、<sup>(11)</sup>やや、<sup>(12)</sup>ためらひて、<sup>(13)</sup>仰せ言伝へ、<sup>(14)</sup>きこゆ。

「『しばしは夢かとのみたら、<sup>(15)</sup>れしを、やうやう思ひしづまるにしも、さむべき方なくたへがたきは、いかにすべきわざにかとも問ひあはずべき人だになきを、<sup>(16)</sup>忍びては参りたまひなむや。若宮の、いとおぼつかなく露けき中に過ぐしたまふも心苦しう思さるるを、<sup>(17)</sup>とく参りたまへ』など、はかばかしいものたまはせやらず、<sup>(18)</sup>むせかへらせたまひつつ、<sup>(19)</sup>かつは、人も、<sup>(20)</sup>心弱<sup>(w)</sup>く見たてまつるらむと、<sup>(21)</sup>思しつつまぬにしもあらぬ御気色の心苦しさに、<sup>(22)</sup>うけたまはりもはて、<sup>(23)</sup>ぬやうにてなむまかではべり、<sup>(24)</sup>ぬる」とて、<sup>(25)</sup>御文奉る。

問一 二重傍線部 (1)～(5) の敬意の対象の組み合わせとして最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 41 にマークしなさい。

- |   |          |          |          |          |          |
|---|----------|----------|----------|----------|----------|
| ア | (1) 帝    | (2) 母君   | (3) 母君   | (4) 母君   | (5) 母君   |
| イ | (1) 帝    | (2) 母君   | (3) 靱負命婦 | (4) 母君   | (5) 母君   |
| ウ | (1) 帝    | (2) 母君   | (3) 靱負命婦 | (4) 靱負命婦 | (5) 靱負命婦 |
| エ | (1) 帝    | (2) 靱負命婦 | (3) 母君   | (4) 靱負命婦 | (5) 靱負命婦 |
| オ | (1) 靱負命婦 | (2) 靱負命婦 | (3) 母君   | (4) 母君   | (5) 靱負命婦 |

問二 傍線部 (a) の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 42 にマークしなさい。

- ア 「派遣する」の意の尊敬語で、帝に対する敬意を表す。
- イ 「派遣する」の意の尊敬語で、靱負命婦に対する敬意を表す。
- ウ 「派遣する」の意の謙讓語で、帝に対する敬意を表す。
- エ 「派遣する」の意の謙讓語で、靱負命婦に対する敬意を表す。
- オ 「派遣する」の意の謙讓語で、行き先である母君に対する敬意を表す。

問三 傍線部 (b)・(e) の解釈として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中からそれぞれ一つずつ選び、(b) は解答欄 43 に、(e) は

44 にマークしなさい。

(b)  
43

- ア ゆっくりと古歌を吟じていらっしやる  
イ 少しの間おやすみになっていらっしやる  
ウ そのまま物思いにふけていらっしやる  
エ しばらくしてから月を鑑賞していらっしやる  
オ いつまでも靱負命婦を見送っていらっしやる

(e)

44

- ア 間を置いて  
イ 威儀を正して  
ウ あれこれ迷って  
エ もったいぶって  
オ 気持ちを落ち着けて

問四 傍線部(c)は、次の※の歌による表現である。※の歌および本文(傍線部(c))の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 45 にマークしなさい。

※ うばたまの闇の現はさだかなる夢にくらもまさらざりけり (『古今和歌集』)

- ア ※の歌も本文とともに、闇の中もはっきりした夢もたいして変わらないから、夢でよいから逢いたいという。
- イ ※の歌も本文とともに、闇の中ははっきりした夢とたいして変わらないから、闇の中では逢いたくないという。
- ウ はっきりした夢よりもむしろ闇の中で逢いたいという※の歌に対して、本文ははっきりした夢で逢いたいという。
- エ 闇の中よりもむしろはっきりした夢で逢いたいという※の歌に対して、本文は闇の中では逢いたくないという。
- オ 闇の中もはっきりした夢もたいして変わらないという※の歌に対して、本文は闇の中でもよいから逢いたいという。

問五 傍線部(d)の「心地」の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 46 にマークしなさい。

- ア まだ世慣れていない若宮の気持ち
- イ ものの情趣を解さない母君の気持ち
- ウ ものの道理を知らない典侍の気持ち
- エ この里の寂しさをご存じない帝の気持ち
- オ もののわきまえない靛負命婦の気持ち

問六 傍線部 (f) はどういうことか。最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 47 にマークしなさい。

ア 若宮だけを、早く参内させなさい、ということ。

イ 若宮と母君が連れ立って、早く参内しなさい、ということ。

ウ 若宮の養育方法について、早く返事をしなさい、ということ。

エ 若宮を里に置いて、母君だけ、早く参内しなさい、ということ。

オ 若宮の無事な成長を祈願して、早く神社に参詣しなさい、ということ。

問七 点線部の助動詞 (三)・(四)・(五) の意味として最もふさわしいものを、次のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、(三) は解答欄 48

に、(四) は 49 に、(五) は 50 にマークしなさい。

ア 受身    イ 打消    ウ 可能    エ 完了    オ 自発    カ 尊敬

問八 点線部の動詞 (一)「過ぐし」・(二)「たふ」の、

1 活用の行    2 活用の種類    3 活用形

は何か。該当するものを、次のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、(一) の 1 は解答欄 51 に、2 は 52 に、3 は 53 に、(二) の 1 は 54 に、2 は 55 に、3 は 56 にマークしなさい。

|   |        |         |         |         |         |        |
|---|--------|---------|---------|---------|---------|--------|
| 1 | ア ア行   | イ ガ行    | ウ サ行    | エ ハ行    | オ ヤ行    | カ ワ行   |
| 2 | ア 四段活用 | イ 上一段活用 | ウ 上二段活用 | エ 下一段活用 | オ 下二段活用 | カ 変格活用 |
| 3 | ア 未然形  | イ 連用形   | ウ 終止形   | エ 連体形   | オ 已然形   | カ 命令形  |

注意 文学部日本文学科・中国文学科・史学科は、次のページに問題が続きます。



問九 (文学部日本文学科・中国文学科・史学科のみ解答すること)

波線部 (X) は、すぐ下の「御遊びなどせさせたまひしに」に続けて読んでしまいが、係り先としてもう一つ別の箇所が考えられる。それはどこか。最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 57 にマークしなさい。

- ア 心ことなる      イ はかなく      ウ 聞こえ出づる      エ ことなりし      オ 思さるるにも

問十 (文学部日本文学科・中国文学科・史学科のみ解答すること)

波線部 (Y) の文法的意味として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 58 にマークしなさい。

- ア 逆接      イ 即時      ウ 添加      エ 比較      オ 類推

問十一 (文学部日本文学科・中国文学科・史学科のみ解答すること)

波線部 (Z) は、誰が心弱いのか。最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 59 にマークしなさい。

- ア 典侍      イ 母君      ウ 帝      エ 鞍負命婦      オ 若宮

〔文学部日本文学科・中国文学科・史学科は **必須**。文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は **選択**〕

文学部日本文学科・中国文学科・史学科は解答欄 **61** ～ **69** に、文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は解答欄 **61** ～ **68** に解答すること。

（文学部日本文学科・中国文学科・史学科は問一～問七で20点）

（文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は問一～問六で30点）

次の文章は、孟子が、ある王が「不智」であるかどうかについて述べたものである。これを読んで、後の問いに答えなさい。ただし、問いの都合で返り点・送りがなを省いた部分がある。

孟子曰、無<sub>レ</sub>或<sub>二</sub>乎王之不智也。雖<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>天下易生之物也、  
 一日暴<sub>レ</sub>之、十日寒<sub>レ</sub>之、未<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>能生者也。吾見<sub>二</sub>亦罕<sub>レ</sub>矣。吾退<sub>レ</sub>、  
 而寒<sub>レ</sub>之者至<sub>レ</sub>矣。吾如有<sub>二</sub>萌焉<sub>レ</sub>何哉。今夫<sub>レ</sub>弈<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>数、小数  
 也。不<sub>レ</sub>專<sub>レ</sub>心致<sub>レ</sub>志、則<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>也。弈<sub>レ</sub>秋、通<sub>レ</sub>国之<sub>レ</sub>善<sub>レ</sub>弈<sub>レ</sub>者也。使<sub>レ</sub>弈  
 秋<sub>レ</sub>誨<sub>レ</sub>二人<sub>レ</sub>弈、其<sub>レ</sub>一人<sub>レ</sub>專<sub>レ</sub>心致<sub>レ</sub>志、惟<sub>レ</sub>弈<sub>レ</sub>秋<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>聽<sub>レ</sub>一人<sub>レ</sub>雖<sub>レ</sub>  
 聽<sub>レ</sub>之、一<sub>レ</sub>心<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>鴻<sub>レ</sub>鵠<sub>レ</sub>將<sub>レ</sub>至<sub>レ</sub>、思<sub>レ</sub>援<sub>レ</sub>弓<sub>レ</sub>繳<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>射<sub>レ</sub>之。雖<sub>レ</sub>与<sub>レ</sub>之

俱<sub>ニ</sub> 学<sub>フ</sub>、弗<sub>レ</sub> 若<sub>カ</sub> 之<sub>ニ</sub> 矣。 為<sub>ニ</sub> 是 其 智 弗<sub>レ</sub> 若 与。 曰 非<sub>ザル</sub> 然<sub>(Z)</sub> 也<sub>ト</sub>。

(『孟子』)

(注)

○或―「惑」に同じ。疑う。

○暴―日に当てる。

○吾見―孟子が王に会うこと。

○弈―囲碁。

○数―わざ、技術。

○弈秋―人の名。

○通国―国中に知られた。

○誨―教える。

○鴻鵠―鳥の名。

クグイ、またはオオハクチョウ。

○弓繳―鳥などをからめ捕るために矢に糸をつけた狩猟具。

問一 波線部 (X) と (Z) の送りがなを含めた読み方として最もふさわしいものを、次の ア～エ の中からそれぞれ一つずつ選び、(X) は解答欄

61 に、(Y) は 62 に、(Z) は 63 にマークしなさい。

|        |         |      |         |
|--------|---------|------|---------|
| (X) 亦  |         |      |         |
| 61     | ウ       | イ    | ア       |
| エ      | かつ      | ただ   | それ      |
| また     |         |      |         |
| (Y) 与之 |         |      |         |
| 62     | ウ       | イ    | ア       |
| エ      | これにくみして | これと  | これにあたへて |
| これももつて |         |      |         |
| (Z) 然  |         |      |         |
| 63     | ウ       | イ    | ア       |
| エ      | しかること   | しかるに | しからば    |
| しかれども  |         |      |         |

問二 傍線部 (a) の書き下し文として最もふさわしいものを、次の ア～エ の中から一つ選び、解答欄 64 にマークしなさい。

- ア 未だ生ずる能はざる者有るなり
- イ 未だ能く生ずる者有らんや
- ウ 未だ能く生ずる者有らざるなり
- エ 未だ生ずる者を能ふこと有らざるや

問三 傍線部 (b) のように述べたのはなぜか。その理由として最もふさわしいものを、次の ア～エ の中から一つ選び、解答欄 65 にマークしなさい。

- ア 孟子が王に何かを教えても、会わない間に邪魔をする人物が現れるから。
- イ 孟子は王に植物の育て方を教えたが、王は孟子が去ると教えを忘れたから。
- ウ 孟子が王に会おうとすると、王が学ぶことに反対する人に邪魔されるから。
- エ 孟子が王に会って教える機会が少ない上に、そもそも王に能力が無いから。

問四 傍線部(c)の解釈として最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、解答欄 66 にマークしなさい。

ア 弈秋が一人の言うことを聴く

イ 弈秋の説明をしっかりと聴く

ウ 弈秋が聴いていると思う

エ 弈秋に何度も質問する

問五 傍線部(d)の読み方として最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、解答欄 67 にマークしなさい。

ア もつて こうこくを ひきあて いたること ありと なさば

イ もつて こうこくの まさに いたるもの あらんと すと なさば

ウ もつて こうこくの まさに ありて いたる べしと なさば

エ もつて こうこくの まさに いたらんと するもの ありと なさば

問六 本文の内容に合致するものを、次のア～エの中から一つ選び、解答欄 68 にマークしなさい。

ア 習得が難しい技術は、二人の学習者が心一つにして協力して学ぶ必要がある。

イ 人にものを教えるには、優しく接するよりも、厳しく接する時間を長くするべきである。

ウ どんなにつまらない技でも熟達すれば、その技と同時に他のこともできるようになる。

エ 物事を習得するには、集中して意欲的に取り組むことが重要である。

注意 文学部日本文学科・中国文学科・史学科は、次のページに問題が続きます。



問七 (文学部日本文学科・中国文学科・史学科のみ解答すること)

二重傍線部の解釈として最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、解答欄 

|    |
|----|
| 69 |
|----|

 にマークしなさい。

- ア 知能がもう一人に及ばないからだろうか。
- イ 知識が与えられていないからだろうか。
- ウ 知恵を比べてはならないのだからだろうか。
- エ 理解力がないからだろうか。